

『桜 (04/12)』

ひら……………
 ……ひら……ひらと
 桜色の花弁が散っている
 雨の林の中へ
 風の舞の中へ
 ひら……………
 ……ひら……ひらと
 雨の林の中へ
 風の舞の中へ
 桜色の花弁が散っている
 ひら……………
 ……ひら……ひらと
 花卉が流れ散っている
 言葉の無い世界へ
 詩の世界へ
 ひら……………
 ……ひら……ひらと
 私の心が誘われて行く
 誘われて行く
 心が誘われて行く

『詩人の魂 (04/16)』

あああ……………あああ
 人間の自然回帰へは美しく羨ましい
 都市文明に於ける
 合理主義とモーター思想の
 構築と建造物は醜い欲望の塊りである
 ここに文化を求める旅人はおらずや
 人は自然へ自己を開放すべきもの
 しかして人はアイヌ(人間)になりぬ
 しかしてカムイ(神)を知れり
 この集まりをコタン(村)と呼ぶなり
 彼は語るなり
 和人はアイヌ(人間)ではない
 皇民なる奴隷だと

国民(皇民)の前に総理大臣として
 君臨する
 すべからく皇民は彼に頭を下げる
 この国は天皇家の物となれば

この国をこの土地をこの森を
 この川をこの海をカムイの物とし
 アイヌは礼を持ってカムイの物を
 使いたし

利益の為に森・川を崩壊し
 利益の為に森・川の産物を
 一網打尽に捕りつくす
 皇民の行為は如何に？

アイヌは
 この国をこの土地をこの森を
 この川をこの海を
 あまねくカムイの物とし
 自己の生活維持の為にのみ
 カムイに礼を奉って
 彼らが物を捕るなり

あああ……………あああ
 いみじくも和人は
 人間とへはなりえない
 国の長(首)は天皇に頭を下げて
 身が首長の承認を願う

血の汚れたる和人は他地を侵略し
負けても謝ることもなく
金でカタをつけながら一目散に
生きている生きている走っている
疲れた和人でいることを
疲れた皇民でいることに
疲れたこの国に生きていることを

『真珠の涙 (04/23)』

ー命ー
彼と彼女が一心に話をしている
子供が欲しいと
いやだめだと
彼の諦めた気持ちと
彼女の情熱が
激しく言い争いをしている

手話の話は悲しいね
頬から涙が流れ落ちて
心が痛くて辛くて
何時のまにか
彼も彼女も
泣いている泣いている

ー産声ー
おぎゃーおぎゃー
赤ん坊の声は大きく強く
はち切れよとばかりの
元気良い産れでした
母親は恐る恐る
付添を見つめている
父親も苦しみを覚悟して
付添を見つめている

この子は声を出して
泣いています
元気で
普通の子以上に丈夫です

父親と母親は安堵をし
聴く事がない
子の泣き声に耳を澄まし
喋ることが出来ない声を
泣きながら赤ん坊へ向けていた

ー背中ー
我が子を見ながら

涙を流している
父と母の背は美しかった
子が笑うたび
父と母も笑った
この子は神様より
真珠の涙をもらって
産れてきたのだ

『四月の空 (04/30)』

鉛色の空の下は
樹々があつて
家々があつて
路があつて
鉛色の空の下は
童話の町が佇んで
夢が飛び交って
人も犬も猫も
小鳥も馬も牛も
みんな生きています

四月の空はどんよりと
鈍く光って
新緑を輝かせています

今にも雨が降りそうな
 低く垂れ下がった
 灰色の雲を見上げて
 チューリップの赤い花卉
 黄色い花卉が開いています
 水仙の紫だって咲いています
 つくしだって立っています

『森
 (04/30)』

未明が森の中は
 靄が至る所に立ち込め
 立ち木の樹皮は濡れ
 草は露を宿し
 小鳥は囀っています
 ゆっくりとゆっくりと
 樹木は黒く姿をあらわにし
 空は濃い紺色に光
 暗闇は消えて行く
 昨日までの苦しみが
 闇とともに去って行く
 刻々と幕を開ける
 今日と言う日の厳かさ
 醸しだされる冷たい空気
 森の大気が夜明けとともに

街へと流れて行く

end of diary-poem(04)

『100の人骨』

東京副都心の高層ビル街
 風がひゅーう ひゅーう
 抜けています
 この近くで国の管理地で
 100の人骨が出てきました

.....
 「なにが行われたのだ！」
 「.....」

あうあの土地はね
 防疫研究室731部隊拠点です
 まさか.....

本当です 正確には
 旧軍医学学校跡地って言いますが

.....
 731部隊って中国大陸の各地で
 生体実験をした部隊でしょう？

ええ細菌戦の研究もしていたと！
 さらにね頭骨にドリルの穴などが
 ガラス容器の破片も有ったと

空襲の被災者とは言えないですね
 で！？

厚生省は関係者を不問ですよ
 馬鹿な！ いいですか百体以上の
 人骨が出たんですよ
 それも彼の地が遺体骨らしい：
 誰が？ 何故に？ この場所へ？
 不問ですと？

いったい.....
 「なにが行われたのだ！」
 「.....」

新宿副都心高層ビル街は今日も
 蠢き吹き下ろす突風が
 ひゅーうひゅーうひゅーう
 唸りながら通り抜けています

あなた達にだって
その責任が有るのですよ

使用テキスト

1994/03/27 — 朝日新聞, 社説

『懲鎖(ちようさ)の人骨』

東京副都心の高層ビル街
風がひゅーひゅー
通り抜けています
遠く北の大地の下から
懲鎖の人骨が出てきました

サーベルとピストルで
囚人を威嚇し
その鉄道は敷設を
進められた
シベリヤおろし吹雪で
凍てつく断崖を
漠破しながら

倒れる囚人を
警棒で小突き
逃げる者は

背後から銃弾を
日中夜かけて
レールは敷かれる
その枕木の下に

疲労死体・銃弾死体
みんなみんな埋められて
いま汽車が走っている
あの明治の当時
石炭を海まで運んだ
出てくるんですよ
鎖の繋がった白骨が

新宿副都心高層ビル街は今日も
蠢き吹き下ろす突風が
ひゅーひゅーひゅー
唸りながら通り抜けています
あなた達にだって
その責任が有るのですよ

『硫黄山の人骨』

東京副都心の高層ビル街
風がひゅーひゅー

通り抜けています
遠く北の地底に吊り下げられた
硫黄つけの人骨が出るんですよ

釧路の集治監は
西南戦争敗者の衆
軍人・軍属・巡查など
屈強な軍事囚人
いわゆる重罪囚人たち

硫黄山に寝泊まりして
硫黄を掘っては
標茶へ送っていました
モッコに採掘石を入れて
よろけようものなら死

亜硫酸ガスがたちこめた
地獄の労役が
出てくるんですよ
アトサヌブリの地中から
☹ 体の遺骨が

今なら人権問題で
この政府は世界から
弾圧されようが
なあ安田善次郎よ
非人道を遂行した安田典獄よ

新宿副都心高層ビル街は今日も
蠢き吹き下ろす突風が
ひゅーひゅーひゅーと
唸りながら通り抜けています
あなた達にだって
その責任が有るのですよ

使用テキスト
岩波ブックレット・シリーズ
〔日本の近代史〕5 「明治の北海道」
著者：夏堀正元(岩波書店 350円)

『私たちの人骨』

東京副都心の高層ビル街
風がひゅーひゅー
通り抜けています
消されて行った者の骨が
ヒューヒューヒュー

震いて音を発っています

あれは そう
慰安婦の骨音
慰安婦の哭く声
闇に消されて行った
者の血がしたたる
私たちの五臓六腑が
恨み泪の風切り音

将校は若い娘ピーを
兵隊は慰安所へ行行列を
非人間にされた
彼女たちの人生
名前すら消されて
軍票も紙屑にされ
過去に口を噤んだ女達

語る事も出来ない
ベニヤ一枚仕切一畳
女達の生活
やっとの帰国も
慰安婦という噂の矢

故郷からも姿を消した女達
誰もその行先を知らない

新宿副都心高層ビル街は今日も
蠢き吹き下ろす突風が
ひゅーひゅーひゅー
唸りながら通り抜けています
死ななければ終の住み家へ
行けない女達
あなた達にだって
その責任が有るのですよ

使用テキスト「帰らぬ女たち」 350円
岩波ブックレット No.261
著者：富山妙子 発行所：岩波書店

End all 1995/04